本業、墓碑銘、その模寫圖、語り物年表、門弟等。詳密を極めたものである。これより以前に前記した如く三代目竹本筆太夫にも此種の著述が三冊あるが、それはとても比較にならぬほどの大著述である。こんな大著書を作り上げた人は藝苑他に類がないことで、特筆大書の價値がある、此書の全部は同翁から亡父が讓り受けて私の家に傳はつてゐる。

# 左官の綱太夫（六代目）

## 全身刺青の美音家

◇

三世長門太夫が江戸興行中に、門弟の登志太夫――藏前の松屋佐衛といふ人――が出入りの左官屋さんの息子だが、と云つて連れて來たのがこの綱太夫。全身に刺青があつて、小意氣な江戸つ子肌、馬鹿に美しい聲を有つてゐたので大阪へ連れて歸ることになつた。始め織太夫と付けて貰つてゐた。天保十一年の生れで、明治十六年四十四歳で死んだ。

◇

忠臣藏の茶屋場で、端役も端役一力の亭主を掛合で振り當てられたので、內心大いに憤慨した綱太夫否織太夫。なんとかして腹癒せをしてやらうと考へて、――離れ座敷へ灯をともせ仲居ども――といふあの一句を、新作して特に柳楊に工夫を凝らして、特有の仇な美聲を振りまわしたので皆吃驚してしまつた。けれども此美音が忽ち大評判になつてしまつて、現に此時の此人の云ひ廻はしが今日まで傳はつてゐるのだから面白い。

◇

江戸前の氣象で、可なり奇行に富んだ、變り物だつた。明治十年綱太夫と改名をした時。――大江橋の芝居で、夏祭の八ツ目（團七の內）を勤めてゐた――都々逸坊扇歌と兄弟分の盃をした。此仲介をした講釋師の石川一口の法善寺の席で、扇歌が三味線を彈いて綱太夫が端唄を歌ふといふやうなことを遣つた。もちろん大喝采だつたといふことだが